

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 11 日現在

機関番号：24505

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26463424

研究課題名(和文) 明治期における産婆の実技(わざ)と職業的確立の周辺

研究課題名(英文) The circumstances of practical skill (technique) and occupational probability of Sanba in the Meiji era

研究代表者

高田 昌代 (TAKADA, MASAYO)

神戸市看護大学・看護学部・教授

研究者番号：50273793

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、助産に携わる職業に「産婆」の名称が用い始められた明治期における、産婆の職業的確立にかかわる歴史的経緯、当時の現任教育内容および産婆や産科医の知識や実技(わざ)を、「産婆學雑誌」を紐解くことにより明らかにすることを目的とした。結果、産婆學雑誌が発刊されたこの時期、細菌学の発展により産褥熱などの回避方法が明らかになってきたことで、産婦に最も近い産婆に対して、これまでの経験知だけでなく、科学的な視点を持ちあわせる必要性を随所に説いていた。また、楠田謙蔵氏は、当時の産婆の現任教育に、生活的視点と科学的視点を持つための現任教育を「産婆學雑誌」の発刊を通じて精力を注いだ。

研究成果の概要(英文)：It was during the Meiji period that the name of "Sanba" began to be used for midwifery occupation. This study aimed to clarify the historical circumstances related to the occupational establishment of a midwife in the Meiji Era, the contents of in-service education at that time, the knowledge and techniques of midwives and obstetricians. For them, I used "Sanbagaku-zasshi". As a result, evolutionary methods such as puerperal fevers have been clarified by the development of bacteriology at this time of magazine publication. Therefore, he taught everything about necessity to bring scientific perspective as well as past experiences to the mother who is nearest to the maternal woman. In addition, Mr. Kusuda Kenzou energetically put in on-the-job education for the midwives at that time through in-service education to have a living perspective and a scientific perspective "Sanbagaku-zasshi".

研究分野：助産学

キーワード：産婆學雑誌 明治期 産婆

1. 研究開始当初の背景

親族や近隣での互助、トリアゲババといわれる半職業的な助産の担い手によって多様な形で行われていた助産が、国家によって干渉され始めるのは明治初年(1868)からである。明治政府は、西洋諸国をモデルに新しい国家の建設に向けて産婆や医師を刷新しようと考え西洋医学教育を学び国家免状を得たもののみに許される職業と位置づけた。政府は法令を整備し、西洋医学を学んだ産科医による産婆教育が行われることとなった。明治初期はいわゆるお雇い外国人による産科教育がなされたが、1880年代頃より外国留学から戻った日本人産科医によって、日本自前の産科教育が行われるようになった。

明治7(1874)年文部省より発布された医制76条の中に産婆の資格、職分の規定がされた。当時の産婆は「40歳以上で、婦人小児の解剖生理および病理の大意に通じ、産科医より出す実験証書を所持するものを検し免状を与える」と年齢制限もあり、女性への教育を行い、免状がなければ産婆業務を禁止するという職業人として認識されていた。この立案の中心となったのは、これは岩倉遣欧使節団に随行し、欧米各国の医療制度を視察してきた当時の厚生大臣であった長と専斎(1838 - 1902)である。この頃の産婆と産科医の関係について、ドイツ産科医のシュルツェや産科医の浜田玄達による産婆学教科書を史料にして、産婆と産科医の領域区分が産科医の恣意によって決められ、しかもその「異常」の領域が拡大していることが分ると指摘している(木村2013)。これ以外に、この時期の産婆関連雑誌としてはこれまで大阪の産科医である緒方正清「助産ノ栞」(1896-1944)が主要な史料として紹介され、性と生殖の社会統制について、またその担い手としての産婆の存在を指摘している(大出2008)

が、その他に言及されたものは見当たらない。

楠田謙蔵氏は、紅杏塾を開いて産婆養成を行った桜井郁二郎の産婦人科病院医員となり、産科手術を教授、産婆の養成に努める。「桜井氏産科手術学」、「桜井氏産婆手術書」を書きあげている。楠田氏は日本産婆学協会を発起人として創設し、「産婆學雑誌」の発刊、産科学に力を発揮し、楠田産婦人科病院内の高等産婆学校で、新産婆の養成に力を注いだ人物である。産婆學雑誌の名称の変遷は表1のとおりである。

明治7年に発布された医制によって、産婆と医師との業務が法的に区別されたが、どのような役割をお互い担っていたのかは明らかでない。ことに緒方正清らの「助産婦」史観とは別の視点からみた産婆の歴史は、明らかになっていない。「産婆學雑誌」13号の「日本産婆学協会設立の趣旨」には、欧米の女性と日本の女性を比べると、特に日本女性の婚家後の健康や人生の質が損なわれることが多いのは、出産におけるしっかりした養生が足りないからであるとしている。その改善を主導する産婆の正しい教育が喫緊の課題と企図し、楠田謙蔵が発起人・会長として日本産婆学協会を組織し、その運営を主導し、自身の病院内で毎月1回の産科実技や治験についての研究会を主催し助言、あるいは意見交換をしている。一介の研究者として、産婆を含む会員たちと地位や名誉にとらわれず、誰もが「君」「姉」の間柄で真摯な意見交換の場を設けた。「産婆學雑誌」を毎月発行していたことは、現在でいえば学会の設立、学術学会誌の発行というようなものであろう。また「産婆學雑誌」は当時の内務省の許可を得て月例に発行されており、当時の産科医や助産師に向けた主なる専門書として一定の影響力を保持していたとみられる。この雑誌の内容は助産師の現任教育にあたるものであり、

この分析により、当時の現任教育内容および産科医や産婆の知識や実技（わざ）が明らかにできると考えられた。

表1 産婆學雑誌の1号から168号までの名称の変遷

1号（明33.1） - 63号（明38.3）「産婆學雑誌」日本産婆學協会

64号（明38.4）「助産學雑誌」日本助産学協会

65号（明38.5） - 66号（明38.6）「産科婦學雑誌」日本産科婦学協会

67号（明38.7） - 122号（明43.12）「産科婦雑誌」日本産科婦協会

123号（明44.1） - 168号（大3.11）「産婆學雑誌」日本産婆學協会

* 以後廃刊

2. 研究の目的

本研究は、助産に携わる職業に「産婆」の名称が用い始められた明治期における、（1）産婆の職業的確立にかかわる歴史的経緯、（2）当時の現任教育内容および産婆や産科医の知識や実技（わざ）を、史料に基づき明らかにすることを、目的とする。

その際に、日本産婆學協会から発行された「産婆學雑誌」（1900 - 1922）の史料と、その設立者である産科医の楠田謙蔵氏の著書を、主な手掛かりとする。この時期の産婆関連雑誌としては、これまで大阪の産科医である緒方正清「助産ノ栞」（1896-1944）が主要な史料として紹介されているが、当時の内務省が許可に与えられて楠田氏が設立した日本産婆學協会およびその協会誌である「産婆學雑誌」についての記述は、現在までの助産学の教科書や出産の歴史書には見当たらない。「産婆學雑誌」を読み解くことは、明治以降の産婆とそれを取り巻く医師らの考え方や、両者の関係を読み取ることを可能とする。

明治期の産婆をとりまく環境や最初期の

助産師（産婆）の能力と、それらに醸成され現在まで続く助産師教育の根源となる原理の一端を明らかにすることで、今後の助産師教育や現任教育への提言を得ることを目指す。

3. 研究の方法

1) 研究者および研究協力者(文化人類学者・吉村典子氏、助産学研究である奥山葉子氏、同・宮下ルリ子氏、有本梨花氏、平田恭子氏)および若手研究者として助産学・看護学専攻の大学院生によって「産婆學雑誌」の現代語訳と分析を行った。

2) 楠田氏の著書の分析を踏まえて、明治期の産婆の技や現任教育の状況について検討した。

3) 関連研究者（文化人類学者・吉村典子氏、助産の歴史の研究者・岡本喜代子氏、歴史学者・高橋みや子氏を招いて合同ワークショップを行い、本研究の目的に照らした検討をおこなった。

4. 研究成果

1) 産婆の職業的確立にかかわる歴史的経緯

産婆學雑誌が発刊されたこの時期、細菌学の発展により細菌感染の原因菌が特定されるようになり、産褥熱などの回避方法が明らかになってきた。これまでの経験知だけでなく、科学的な視点を持ちあわせる必要性を随所に説いていた。そのため、産婆には科学的な知識を持ち合わせたいうえで実践に臨むことが専門職であることが説かれていた。例えば、産褥熱を出すような対応をすれば恥と思うようにと戒めの記述や尿検査の必要性などが見受けられる。

さらには、統一した分娩記録様式の活用とそのデータの収集を産婆學雑誌やその会合と通し、産婆にも依頼しており、分娩に対する種々の根拠を見出すために情報収集

を行っていたものと考えられる。

2) 当時の現任教育内容および産婆や産科医の知識や実技(わざ)

産婆學雑誌の理念

楠田氏は本誌の冒頭に、「産婆の仕事は日常生活の中にある女性の幸不幸、ひいては家族の幸不幸を左右する重要なこと」と説いている。そのため、本誌では随所に、「妊産婦にとってどういうことになるか」を中心に記述されていた。また、生活者である女性に対応していることが読み手にわかるために、事例にはその妊産婦の生活が浮き彫りになる記述がなされていた。

妊娠・出産時にお産を扱う者が、明日からでも臨床において実践できるよう、簡潔で具体的表現がなされていた。

臨床経験の積み重ねが持つ意義

本誌には、事例(産婆學雑誌には「實驗」と記される)が多く掲載されていた。妊婦健診が充実することなく分娩時だけ呼ばれる産婆にとって、分娩時の出血や多胎などの異常な出来事は突然でありその対処方法を熟視しておく必要がある。しかし、当時の情報ネットワークでは近隣の産婆の経験を聞くに留まっていたと推測される時代においては、他の産婆や医師の臨床経験を読み共有することは、自らの知識と技の積み重ねになっていた。

楠田謙蔵氏の産婆に対する共育理念

楠田氏は、出産は一家にとってもまた国にとっても重要な出来であるにもかかわらず、それを担っている産婆の役割の重要性が社会に認識されていないことを説いている。彼は、出産が安全に行われ、幸せになることに目標をおき、その達成のために産婆の教育は不可欠であるとしていた。史料の中で楠田氏は産婆教育の考え方として、産婆が日進月歩である科学的知識は常に新しく習得できるようにすること、その水準

を保つようにすること、日常生活の養生に関して産婦等に教育できるようにすることであった。楠田氏はそのために日本産婆學協会の設立し、産婆學雑誌の発行や例会の開催に尽力していた。明治32年産婆規則が公布された時代に、「いいお産」のために産婆を専門職として教育し、生涯教育の必要性を説くなど先駆的な教育理念を持ち合わせていたと考えられる。

産婆に必要とされた尿検査の知識

妊婦尿にもし腐臭があれば必ず検査しなければならないとし、妊娠中の最も不快な合併症として腎臓炎の診断について、浮腫の状態の観察と合わせて尿の検査方法を教授していた。量の検査項目として示されていたのは、尿の性状や尿量、蛋白量、顕微鏡下での有形物質等であった。特に尿タンパクの検出においては7種類の方法が紹介され、具体的な実施上の留意点を示されていた。母体を守るために産婆に尿検査に関する専門的知識を理解した上で、従来から大切に守られてきた産婆の五感を駆使した観察方法に加え解剖学や生理学科学といった最新の知識の教育も必要と考えられていた

新生児の栄養の考え方

新生児の栄養の基本的考え方は、人にとって最良の栄養物は母乳であり母体が健康であるなら母乳で育児すべきだされている。しかし母親の健康が損なわれ母乳分泌が不足する場合は、第一選択は乳母を雇う事、第二選択にやむを得ず人工栄養を使用することとされている。人工栄養の使用に際し産婆に必要とされる知識、技術、看護として、人工栄養の種類、牛乳と母乳の成分と消化の違い、牛乳使用時の濃度、哺乳量の目安、牛乳の腐敗感染症、牛乳の煮沸法保存法、哺乳器の使用方、練乳の成分使用法、人工栄養児の観察と異常症状の出現したときの対処法であった。母乳に代わる

安全な人工栄養がない明治期において安全な人工栄養法について児を感染から守るための専門的知識を持ち、日常に即応できる知恵や生活技術が産婆に必要とされた。

産婆に必要とされた多胎管理

多胎分娩については産婆だけの場合と医師にも立ち会い依頼している場合の両方が報告されていた。妊娠中に多胎と診断されていたかについては明記されていない。双胎は妊婦に自覚兆候があることを診断時には価値があるとしていた。また、産婆が双胎を取り扱った場合にはその情報(データ)を収集する調査についても依頼していた。情報とは、自覚兆候があった月数、経産回数、性別及び発育状況、分娩月数、産婦の性格、羊水過多の有無であった。多胎分娩の事例については、具体的な計測値測や胎盤計測値も示されていた。多胎妊娠の診断が難しかった明治期では産婆のみで分娩を行うことも多かったことから、知識を持ち分娩介助するの必要のために、調査などが行われていた。

産婆と産科医が取り扱った薬物

産婆と産科医が当時あった薬物は、様々な場面に置いて症状・疾病ごとに使用薬物使用方法が記載され、産婆の知識の向上につながっていたと思われる。妊産婦や新生児に対し西洋医学と漢方を融合させて薬物が使用されていたが、産婆が記述した場面においては、漢方の薬物が主流であった。当時、自宅分娩が主流で産婆が主に妊産婦や新生児の手当てを担っていた中で、産婆が携帯すべき医薬品や得るべき治療法を駆使して、どんな時でも出来得る限りの方法で妊産婦と新生児の健康守ろうとする産婆の姿勢が伺えた。

産婆に必要とされた産後出血に関する知識・実技・心得

当時の産後出血に関する知識は現在と大差なく、手技を用いて触診や処置を丁寧に

施していた。明治期の産婆は日々の分娩において、危急の事態では消毒法を熟知した上で注射器の使用や胎盤の娩出等の処置を施していた。産後出血時においては産婦の救命、女性と家族の幸福のために、産婆が出血源を探索し医師と共同して行うことが必要との認識のもとに進められていた。

産婆に求められた「産褥熱」に対する知識と実技

明治期の産褥熱に関する産婆の知識は、十分でなく、「産婆學雑誌」は感染症に関する最新の知識や予防法を非常に詳しく提供をしていた。また、感染や防腐消毒法といった最新の知識についても丁寧に紹介され、その方法は産婆の技術によって女性たちが救われるのであることも充分考慮されて書かれていた。産褥熱は、予防が産婆の取り込むべき最大重要課題だと考えられ、専門的職業人とし必要な知識と技術であった。

産婆に必要とされた骨盤位分娩の知識と実技

骨盤位分娩に関して産婆に求められた知識としては、ア．骨盤位分娩における異常の予防と対処の必要性、早期破水予防や児の牽引禁止など、危険回避のための対処や根拠、イ．分娩経過中の骨盤と胎児の位置関係については解剖学的知識に基づいて非常に詳細に描写できる能力、ウ．骨盤位分娩は頭位より危険性が高い理由、胎児が窒息状態に陥る基準について解剖学生理学的一時期に基づいて説明力、が求められた。実技に関しては、骨盤位は特徴的な触診、聴診、内診所見と分娩期の診断所見について詳細な知識が求められた。胎位胎向分類を含む骨盤位分娩で診断した際に危険性の高い側位の分娩介助、新生児仮死の処置を実際にできることが求められた

5．主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

吉川恵理、嶋澤恭子、藤井ひろみ、高田昌代他 7 名：産婆試験にみる明治期の産婆に必要とされた骨盤位分娩の知識と技能、兵庫県母性衛生学会雑誌 25 号、pp44-47、2017

末上純子、吉川恵理、嶋澤恭子、藤井ひろみ、高田昌代他 6 名：産婆學雑誌にみる骨盤位分娩の事例における産婆の役割、兵庫県母性衛生学会雑誌 25 号、pp48-50、2017

〔学会発表〕(計 9 件)

高田昌代、小笠原百恵、駒井江里他：産婆學雑誌に見る楠田謙蔵氏の産婆に対する共育理念の分析、第 56 回日本母性衛生学会、2015

小笠原百恵、高田昌代、駒井江里他：「産婆學雑誌」にみる産婆に必要とされた尿検査の知識、第 56 回日本母性衛生学会、2015

駒井江里、高田昌代、小笠原百恵他：「産婆學雑誌」から紐解く明治期における新生児の栄養の考え方について、第 56 回日本母性衛生学会、2015

谷口真紀、嶋澤恭子、藤井ひろみ他：「産婆學雑誌」にみる明治期の助産師に必要とされた多胎管理、第 30 回日本双生児研究学会、2016

吉川恵理、嶋澤恭子、藤井ひろみ、有本梨花他：産婆試験にみる明治期の産婆に必要とされた骨盤位分娩の知識と技能、兵庫県母性衛生学会雑誌 25 号

吉川恵理、嶋澤恭子、藤井ひろみ、高田昌代他 7 名：産婆試験にみる明治期の産婆に必要とされた骨盤位分娩の知識と技能、第 28 回兵庫県母性衛生学会、2016

末上純子、吉川恵理、嶋澤恭子、藤井ひろみ、高田昌代他 6 名：産婆學雑誌にみる骨盤位分娩の事例における産婆の役割、第 28 回兵庫県母性衛生学会、2016

平屋恭子、嶋澤恭子、高田昌代他：1901 年（明治 34 年）に出版された「産婆學雑誌」にみる産婆と産科醫が取り扱った薬物、第 30 回日本看護歴史学会、2016

奥山葉子、藤井ひろみ、高田昌代：明治期の産婆に必要とされた産後の出血に関する知識・実技（わざ）・心得、第 30 回日本看護歴史学会、2016

細川由美子、高田昌代他：「産婆學雑誌」にみる明治期の産婆に求められた「産褥熱」に関する知識と実技（わざ）第 30 回日本看護歴史学会、2016

藤井ひろみ、高田昌代他：明治 34 年「産婆學雑誌」における産後の出血とその周辺の記述から見た産婆への要請、第 31 回日本助産学会、2017

高田 昌代 (TAKADA Masayo)
神戸市看護大学・看護学科・教授
研究者番号：50273793

(2)研究分担者

藤井ひろみ (FUJII Hiromi)
神戸市看護大学・看護学科・准教授
研究者番号：50453147

嶋澤 恭子 (SHIMAZAWA Kyoko)
神戸市看護大学・看護学科・准教授
研究者番号：90381920

(3)研究協力者

奥山葉子 (OKUYAMA Yoko)
宮下ルリ子 (MIYASHITA Ruriko)
平田恭子 (HIRATA Kyoko)
有本梨花 (ARIMORI Rika)
末神純子 (SUEGAMI Junko)
吉川恵理 (YOSHIKAWA Eri)
小笠原百恵 (OGASAWARA Momoe)
駒井江里 (KOMAI Eri)
谷口真紀 (TANIGUCHI Maki)
細川由美子 (HOSAKAWA Yumiko)
吉岡恵理 (YOSHIOKA Eri)
山名華代 (YAMANA Hanayo)
金川景子 (KANAGAWA Keiko)

6. 研究組織

(1)研究代表者